# ヒンドゥ教徒の見方でのイエス・キリスト

### 2016年12月18日

### 逗子例会

### スワーミー・メーダサーナンダによる講話

### 於・逗子協会

どの宗教の信者であるかに関わらず、霊的生活を実践し霊的に進んだレベルにある人は、他の宗教において霊的に完成した人物について、自信を持って語り、評価することができるでしょう。しかし、こうした霊的偉人を信奉する信者らの間でも、いろいろな意見が見られます。これはどの宗教であっても同じです。今日はイエス・キリストについてお話をするのですが、キリスト教徒の間でも様々な意見があります。聖書を読んで評価することもできますが、キリスト教徒にはカトリックの人びと、プロテスタントの人びとがいて、さらに意見を異にする色々な宗派があります。また、特定の宗派に属していないけれども、自分をキリスト教徒だと見なし、特定の見方をする人もいます。このように、霊性の巨人に対する評価は同じではありません。

## イエス・キリストとラーマクリシュナの伝統

イエスは実は東洋の人ですが、キリスト教は西洋で育まれてきました。ですから、東洋の人に対する西洋の見方ということになり、当然、そこには違いが生じます。また、様々な宗派が異なる意見を持っていますし、他にもいろいろな要素が絡んでいます。ですから、このような議論をする際には、評価の対象に対して、意見を述べる者がどのようなスタンスを取っているのか、はっきりさせる必要があります。イエスのような人に対して批評家のような態度を取っているのでしょうか、それとも深い尊敬と理解を持っているのでしょうか。これは忘れてはならない重要な点です。尊敬の念と理解があることが明らかなのであれば、細かい点がいろいろと違っていてもあまり問題ではありません。

シュリー・ラーマクリシュナは、ドッキネッショルのカーリー寺院のご自分の部屋に、溺れかけているペテロをイエスが助ける場面の絵を飾っていらっしゃいました。当時、このようなことを正統なヒンドゥ教の祭司がするのは理解しがたいことでした。またラーマクリシュナは、聖書の朗読もよくお聞きになり、イエスに対して深い尊敬の念を抱いておられ、イエスのビジョンも見ておられました。このことはすべて記録に残っています。当時イギリスに支配されていたインドには、西洋のキリスト教宣教師がたくさん来ていました。カルカッタなどにはキリスト教会が建設されて人々に教えが説かれ、インド人はキリスト教をよく知るようになりました。進歩的な考えを持つヒンドゥ教徒は、キリスト教徒ではなくてもキリスト教やイエス・キリスト、聖書についてかなりの知識を持っていました。キリスト教宣教師が運営する大学の中には、聖書を学ぶ授業が必須科目になっているところもありました。スワーミー・サーラダーナンダジーはこのような大学で学びましたし、他の直弟子や信者らのなかにも、イエスについてよく知っていたりイエスに対して大きな尊敬の念を抱いていたりする人がいました。ブラーフモー・サマージのリーダーの一人であったケシャブ・チャンドラ・センもイエス・キリストを強く信奉していました。

偶然のことですが、スワーミー・ヴィヴェーカーナンダジー（スワーミージー）が率いる、ラーマクリシュナの出家の直弟子らが出家の最後の誓いを立てたのは、1886年のクリスマス・イブでした。後になってこのことを知った彼らは大変喜び、それ以来、毎年、ラーマクリシュナ・ミッションの本部であるベルル・マトと世界各地の支部でクリスマス・イブを祝っています。このクリスマス・イブのお祝いで、ある時、直弟子らは濃青の服を着たイエスのビジョンを見ました。現在、ベルル・マトのお祝いの様子は、夕拝の後、インターネット上でストリーミング配信されていますので、非常に美しいプログラムを誰もが見ることができます。はるか昔、まだ直弟子らが生きていてベルル・マトに古いメイン・シュラインがあった頃、信者さんたちはまだあまりたくさん来ませんでしたが、プージャというヒンドゥ教のやり方で、敬意を込めてクリスマス・イブの礼拝を行っていました。

ある時、カルカッタにあるキリスト教大学の関係者である二人のキリスト教司祭が、ラーマクリシュナ・ミッションのこの伝統について耳にし、クリスマス・イブの礼拝を見に来ました。プログラムをすべて見終わった後、二人は、「ヒンドゥ教のやり方でこのように礼拝を行うのは正しくない、きちんとカトリックのやり方で行うべきだ」と不満を述べました。これに対し、ミッションの僧侶達は何も答えませんでした。明らかに、この二人の司祭は、敬意と信仰心を以て礼拝を行っていることは認めようとせず、ただ儀式的な部分にだけ関心があったのです。儀式やその他の外面上のことは、礼拝で捧げられる愛や信仰心、敬意ほど重要ではありません。これは、このような儀式の場だけでなく、諸宗教の対話においても最も重視すべき点です。

ヒンドゥ教徒の中にも、進歩的な人もいれば排他的で原理主義的な意見を持つ人もいます。ヴェーダーンタでは、全ての宗教、全ての預言者が、同じ神様の異なる現れであると考えていますが、ヒンドゥ教徒全員がこのような考え方をしているわけではありません。中には、クリシュナだけが信奉されるべきであるとか、何々という神様だけが礼拝されるべきだとか考え、他の預言者を全て重要ではないと見なす人もいます。ですから、今日私が「ヒンドゥ教徒」と呼ぶのは、ヴェーダーンタ的なリベラルな考え方を持ち、他を受け入れる姿勢のある人のことです。このようなヒンドゥ教徒の見方では、イエスは偉大な霊的人格で、イエスだけでなく、ラーマチャンドラも、ブッタも、皆同様で、同じカテゴリーに属していると言えます。そのカテゴリーとは、類まれな人々、「神様の特別な現れ」である人々だけが属するグループです。国籍や宗教は関係ありません。ヒンドゥ教ではこのグループの人々を「アヴァターラ」と呼んでいます。アヴァターラの実の意味は「降下する者」ですが、一般には「神の化身」のことです。このようなアヴァターラには、一次的な印と二次的な印があります。

## 言葉の裏の深い意味

では、これからお話しする「印」を基準として、イエスがアヴァターラと呼ばれるにふさわしいか考えてみましょう。キリスト教では、イエスを「神のひとり子」と呼んでいます。これは説明が難しいかもしれませんが、私の印象では、そして最もシンプルな説明では、私たちは皆神様の子供ですが、イエスは非常に特別な意味で神様の息子であり、これが「ひとり子」という言葉の解釈です。そして、この言葉を理解できるかどうかは、その人が霊的にどれだけ進歩しているかによります。霊的に進んでいる人程、このことを理解するのに必要な叡智の光を多く得ているからです。結局のところ、私たちが抱くイメージというのは非常に主観的です。ですからこのようなことを言葉で説明するのは非常に難しく、「神様の特別な現れ」としか言えません。

シュリー・ラーマクリシュナにまつわる話として、似たような例が一つあります。ラーマクリシュナは、ラカール（スワーミー・ブラフマーナンダジー）のことを「霊的息子（spiritual son）」と呼んでいました。これがどういう意味であるか分かりますか？私たちには、文字通り「ラカールは霊的な意味で息子である」としか考えようがありません。ラーマクリシュナのこのような言葉を耳で聞き、目で読むことはできても、私たちにはそのわずかの意味しか理解することはできないのです。他の例を挙げてみましょう。ホーリー・マザー　シュリー・サーラダー・デーヴィーが、ある時数人の僧侶に、体に巻く新しい布をプレゼントしました。皆がもらった布は綿でしたが、ブラフマーナンダジーだけは絹の布をもらったのです。一人がマザーに、「なぜこのように差別するのですか」と尋ねました。「皆、あなたの息子ではないのですか。」これに対するマザーの答えは大変興味深いものでした。「皆、私の息子ですが、ラカールは『私の』息子ですから」と、「私の」という部分を強調されたのです。このように、ごく普通に聞こえる言葉の裏に、私たちには到底理解できない深い意味が隠れているのが分かりますね。

## 二次的印

では、ヒンドゥ教徒の観点から、アヴァターラの特徴と考えられている一次的印と二次的印という切り口で、イエス・キリストの人物像を描いてみましょう。まず二次的印ですが、これには奇跡の行いがあります。クリシュナの生涯を見てみると、赤子クリシュナが、邪悪な王カンサが送った悪魔らを殺すところがあります。他にも、クリシュナを殺すために手下を送るのですが、悪巧みはすべて失敗に終わり手下は殺されてしまいます。また、人々を洪水から救うために、子供のクリシュナがゴーヴァルダナ山を指一本で持ち上げました。このような超人的なことを子供がするなど信じがたい話で、アヴァターラの生涯にはこうしたことがたくさん起きます。しかし、このような業（わざ）の多くは、偉大なヨーギーも自然を操る力を以って為すことができます。マジシャンも、素晴らしいトリックを使って観客の目には本物のように見える手品を行います。奇跡を行うことがヨーギーやマジシャンにもできるのであれば、奇跡がアヴァターラの主要な印であるとは言えません。単に二次的な印に過ぎないのです。

イエスも素晴らしい奇跡を行いましたが、私たちの見方では、それを以てイエスを「神様の非常に特別な現れ」とか、「神のひとり子」と呼ぶことはできません。では、このような奇跡の背後にはどのような動機があるか、という点から考えてみましょう。普通のマジシャンであれば、当然、その動機はお金です。ヨーギーの中にも、名声に目がくらんで奇跡を行う人がいます。このように、まず背後にある動機を考えてみる必要があります。次に、奇跡を行っている時の主体は誰か、ということです。マジシャンの場合は当然、「マジックをやっているのは自分だ」と意識しています。ヨーギーの場合も「超人的な力を見せているのは自分だ」と考えています。しかしアヴァターラの場合、例えばクリシュナは、動機は自分のためでなく、人々を邪悪な王から救うためでした。イエスの奇跡の行いで、お金や名声のために行われたものはひとつもありませんでした。さらにイエスは、「私がこれをやった」などと決しておっしゃいませんでした。特別な行いをした時にはいつも、感謝と栄光を神様に捧げていました。自分は単なる媒体に過ぎず、神様の御力が自分を通して人々の苦しみを取り除いているのであり、皆、神様に感謝しなくてはならないとおっしゃいました。自分が主体であるという感覚は全くなかったのです。

ヒンドゥ教の霊的実践の観点からすると、奇跡は身を滅ぼすことになるので霊的求道者から嫌がられています。名声を手に入れたり、一時的なものを強く欲したりすることは堕落をもたらし、決して真理を悟ることができなくなります。このような理由で、ヒンドゥ教の霊的実践においては奇跡が嫌われているのです。しかし、神の化身や神のひとり子の場合は、これは当てはまりません。このような人たちは霊的求道者ではなく、すでに霊的悟りを得て高いレベルにあり、他者のために奇跡を行うからです。このような神様の特別な現れは、名声や個人的な利益のような一時的なものに影響を受けることはありません。

## 一次的な印

一方、一次的な印は、常に霊的意識の非常に高い状態にあることです。イエスとラーマクリシュナは同じカテゴリーの人と言えますから、この霊的意識の状態については『ラーマクリシュナの福音』を見てみましょう。『福音』の著者であるMさんは、ほんの一瞬でもラーマクリシュナが神様の意識からそれるのを見たことはなかったと言っています。イエスについては『福音』のような大量の詳細な記録がありませんが、同じだったと理解してよいでしょう。私たち自身が神様を意識している時間はどのくらいあるか、どれほど短く不安定か考えてみてください。瞑想中でさえも、私たちの意識は安定せず簡単に集中が途切れます。瞑想していない時には神様のことなど完全に忘れています。

また、一次的な印として、真実を貫くという点も挙げられます。シュリー・ラーマクリシュナの生涯を見てみると、言葉でも考えでも行動でも常に真実を実践するよう細心の注意を払っていたことが分かります。イエスはどうでしょうか。命が危険にさらされている時に、救われたい一心で真実から離れることがあったでしょうか。イエスの最愛の弟子ペテロでさえ、恐怖心からイエスを知らないと言いましたが、イエスは真実を貫きました。ペテロがイエスのために自分の命を捧げると誓った時、イエスはペテロに言いました。「はっきり言っておく。あなたは今夜、鶏が鳴く前に、三度わたしのことを知らないと言うだろう。」（マタイによる福音書26章34節。『和英対照聖書　新共同訳』日本聖書協会、2001年。以下同じ）虚勢を張っていたのだということが分かりますね。イエスの偉大な直弟子のような、霊的レベルの高い人でさえも、死の恐怖にさらされて弱められ、真実を貫くことができないのです。「神のひとり子」は、命の危険に直面しても譲ることなく真実を貫けます。イエスは「お前がイエスか」と尋ねられた時、自分の運命を知っていながら偽ることなく、「はい」と答えたのです。普通の人のように逃げるどころか、真実はイエスに恐れを知らぬ力を与えました。

一次的な印の三つ目は、霊的知識です。アヴァターラからは、最も高いレベルの霊的知識が溢れ出てきます。イエスの言葉はほんの少ししか記録されていませんが、わずかに記録されたその言葉に霊的叡智が満ち溢れていることは、説明の必要がありません。『福音』や『バガヴァット・ギーター』と同じく、イエスの言葉の中にあるのは、ただ霊的叡智、混じりけのない純粋な霊的叡智、霊性のための霊性です。このような深い霊的叡智の言葉の例として、「神の王国はあなたがたの間にあるのだ」（ルカによる福音書17章21節）、「隣人を自分のように愛しなさい」（マタイによる福音書22章39節）などがあります。

## 懲らしめと慈悲

さらに、誰に対してでも、特に苦しんでいる人々に対して計り知れないほどの無限の愛を持っていることも印の一つです。普通の人は家族や友人のために愛を使い果たしてしまっていて、他人へ差し出す分はもう残っていないかのようです。しかしアヴァターラは、誰をも包み込むかのように愛し、その愛には限りも区別もありません。そして、堕落した者に対するアヴァターラの慈悲も同様です。私たちは善人と悪人、聖者と罪人を区別しますが、アヴァターラは区別せず、むしろ堕落した者に対して、より大きな慈悲を抱きます。この点について、イエスは深みのある言葉を述べています。「医者を必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。」（マルコによる福音書2章17節）このように神様が現れるのは、聖者のためではなく、病人、堕落した者のためであり、彼らが正しい人間になれるようにするためなのです。ラーマクリシュナの有名な信者のギリシュ・チャンドラ・ゴーシュは、ラーマクリシュナのアヴァターラたる性質について、同様の考えを述べています。

『ギーター』の考え方の一つに、神様は邪悪な者を懲らしめ聖者を救いに来る、というものがあります。しかし邪悪な者も神様の子どもではないでしょうか。つまり、神様は邪悪な者を懲らしめるためではなく躾けるために来るのです。今生ではダメでも来世で、邪悪な者が自らを正せるようにするのです。また、ドゥルガー母神はチャンディとして悪魔を滅ぼしにやって来る、という考え方もあります。聖者らはドゥルガーへの賛歌でこう歌っています。「母よ、あなたの何と偉大なことか！一方の手では我らをお守り下さり、もう一方の手ではあなたが殺す悪魔らに慈悲をおかけになる」これはどういうことでしょうか。チャンディ母神が自ら悪魔を殺すとき、悪魔は地獄ではなく天国に行くのです。慈悲の表し方には、私たちが通常考える神様のお慈悲とは随分違うやり方があるのです。

先ほど聖書で読んだところでは、イエスが堕落した者らに対しとりわけ慈悲心を持っているのが分かりました。姦通の罪を犯した女性の話があります。村人がこの女性を石打ちの刑にしようとした時、イエスはこう言いました。「あなたがたの中で罪を犯したことのない者が、まず、この女に石を投げなさい。」（ヨハネによる福音書8章7節）幸いなことに、村人らは内省し、今にも石を投げようとしていたのをやめ、一人、また一人とその場を去りました。その場にいた誰もが、何らかの罪を犯したことがあったのでしょう。そして皆、それについて正直でした。最後にイエスはこの女性に対して、もう罪を犯してはならないと言いました。この女性がマグダラのマリアであるかどうかははっきりしていませんが、イエスの非常に熱心な弟子になりました。

## 他の印

アヴァターラはまた、他の人の考えている事が分かります。イエスは、人が何を考えているか、本当の事を言っているかどうかが分かりました。また、誰かの過去、現在、未来を言い当てることもできました。ラーマクリシュナも同じだったことが『福音』の記述から分かりますね。聖書の中でイエスはこう言っています。「はっきり言っておく。アブラハムが生まれる前から、『わたしはある。』」（ヨハネによる福音書8章58節）イエスはまた、洗礼者ヨハネがかつてエリヤとして現れたと述べています。このような言葉から、イエスには自分や他人の過去が分かったのだということが窺えます。『ギーター』でも、クリシュナがアルジュナに対し、二人ともいくつもの過去世があるがアルジュナはそれを覚えておらず、自分は全て覚えているとおっしゃっています。

神の化身は平安を与えて下さいます。神の化身が、心に平安のない多くの人々に平安を与えた例は数多くあります。私たちが心に安らぎを得られるよう、神の化身は苦しみの源を正しにやって来るのです。イエスはこう言われました。「わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしの軛（くびき）を負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなた方は安らぎを得られる。わたしの軛は負いやすく、わたしの荷は軽いからである。」（マタイによる福音書11章29-30節）普通のヨーギーや僧侶にはこのようなことはできません。自分の心配事や悲しみを背負っているのに、他の人の重荷を取り除くことなどどうやってできるでしょうか。

アヴァターラが救いを与えに来る人々には、二通りあります。苦しんでいる人々と霊的求道者です。アヴァターラは、霊的な道を示しにやって来ます。アヴァターラの生涯には、求道者に対して悟りへの道を示す手本となることがたくさんあります。求道者も苦しんでいる人々なのですが、普通とは違い、霊的成就をゴールとしています。例えば、シュリー・ラーマクリシュナの直弟子らは悟りを求めていましたから、ラーマクリシュナが悟りへの道を示しました。イエスの山上の垂訓は、全てを放棄した近しい間柄の弟子らに対する、最も高い霊的指導の例です。

アヴァターラは人々に解脱を与えます。イエスが、人は「天国に行き神と共にいる」 とおっしゃいましたが 、これはヒンドゥ教徒にとっては解脱の状態に思えます。このような神様の特別な現れだけが、他人を解脱させる力があるのです。ヨーギーの中にも、悟りの高い状態にあって、わずかな人々を解脱させることができる人がいます。しかし、このようなヨーギーは手漕ぎの小舟のようなものです。一方、神の化身は大海を渡る外洋船のように何十万人もの人々にこの世という海をわたらせることができるのです。

神様の特別な現れである人々には素晴らしい特徴が色々あります。彼らには全くエゴがありません。「私はどうということのない存在だ。私は神様の道具で、神様が私を使っていらっしゃるのだ」とか、「神様が、私を通じて働いていらっしゃるのだ」という態度を常に取ります。シュリー・ラーマクリシュナはよくこうおっしゃいました。「マー（母神）よ、私は機械であなたが機械の運転者だ。」聖書には、イエスが「私が称えられるべきなのではない。神を褒め称えなさい」とおっしゃる例がたくさん出ています。これは、「もし癒されたのなら、私ではなく神様を褒め称えなさい。その力は私の力ではなく神様の力である」という意味です。

## 特別な二つの印

神の化身の印にはもう二つあります。まず、生きた時代や場所に関わらず、亡くなった後もその影響は大きさを増していき、その教えは広がり続けることです。特定の時代や場所に限定されることはありません。どの文化や伝統にも聖者やヨーギーは沢山いますが、いったい何人が後の世の人々に知られているでしょうか。イエスやシュリー・クリシュナ、ブッダなどのことを考えてみると、彼らが生きたのは遥か昔のことですが、彼らは今なお忘れ去られていないというだけでなく、彼らの影響は今も存在し広がり続け、世界を包み込んでいます。普通の僧侶や霊的な人々では、このようなことは起こりませんね。

そして最後に、神の化身の重要な印として言えるのは、彼らの主な目的は霊性ですが、彼らが与えた影響は道徳面、宗教面に止まっていないということです。芸術、建築、文学、文化などにも素晴らしい影響を与えています。ブッダやイエスの影響は、文学、音楽、彫刻、絵画、建築などに残っていますね。イエスが西洋文化に与えた影響を取り除いたとしたら、西洋文明の古典文化はいったいどのくらい残るでしょうか。同様に、ブッダやクリシュナ、ラーマなどの影響を除いたら、インドの古典文化はほんのわずかしかないでしょう。

これは、実に驚くべきことです。このようなアヴァターラらは主に宗教的な人物ですが、与えた影響は広範です。比類のない、まさに特別な影響ですね！

## 神様の極めて特別な現れであるイエス

このように、ヒンドゥ教徒から見ると、イエス・キリストが「神のひとり子」であるという考え方は、イエスが神様の特別な現れ、神の化身であるという意味で解釈すると納得できる考えだと言えます。

どうもありがとうございました。